

《修士論文要旨》

## ドイツの歴史認識と国際教科書会議

柴 田 実 穂\*

本稿はドイツの歴史教科書における現代史の記述内容の変化から歴史認識の変容をたどり、ドイツの現代史教育の意味づけの変化を探るものである。

歴史教科書の記述については、戦後に西ドイツで使用されていた歴史教科書の記述の変化をその時代の背景と関連させて考察する。

第二次世界大戦終戦と同時にドイツはアメリカ・イギリス・ソ連・フランスに分割占領され、後にアメリカ・イギリス・フランスの西側諸国の占領地区であった西ドイツとソ連の占領地区であった東ドイツに分かれて冷戦終結まで異なった国として歴史を歩むこととなった。連合軍の占領下に置かれたドイツではドイツ国内からナチを排除するために再教育政策が実施され、そのために歴史教育もドイツの降伏後すぐに中断された。やがて再開された歴史の授業では第二次世界大戦中に使用されていた教科書は全て禁止され、新しい教科書が出版されるまではワイマール共和国時代の教科書の再版が使用された。

1950年までに出版された教科書では現代史は取り上げられず、産業革命や高度資本主義時代までの内容しか取り扱われなかった。ナチや第二次世界大戦の過去が、とくに教える側の教師達にとって近すぎたためであると考えられる。1950年代に入ると現代史の記述がそれまでより増えるが、第二次世界大戦の経過が主な内容でナチの犯罪についてはその中で経過点として取り上げられるに過ぎなかった。また1950年代後半になると第二次世界大戦に関する記述にドイツの被害者としての視点が目立つようになってくる。とくにソ連による被害や東方からの追放の言及は、西ドイツの東側諸国に対する姿勢を表している。

しかし1960年代半ばを過ぎると、若者の右傾化の問題を発端にそれまでの歴史教育における現代史のあり方が見直され、歴史教科書ではナチの過去についての詳しい記述が増やされるようになった。1970年代にはブランド首相の東方政策により東側諸国と西ドイツが接近し、ポーランドとの国交正常化後すぐに西ドイツ・ポーランド歴史教科書会議が行われた。そして歴史教科書にもそれらの影響が見受けられる。1980年代になるとイスラエルとの歴史教科書会議も行われ、ここまで増えていたナチの記述やホロコーストの記述に加え、普通のドイツ人の責任についても言及するように求められるようになり、その後徐々に普通のドイツ人の責任について教科書で触れられるようになった。

国際教科書会議についてはその歴史と主要な機関について説明し、独仏共通歴史教科書の内容について見ていく。

西ドイツ・ポーランド歴史教科書会議より前に行われた西ドイツ・フランス歴史教科書会議  
平成23年度 \*文学研究科文化財史科学専攻

は、第二次世界大戦直前に一度行われていた。それは当時、日の目を見ることはなかったが、終戦後、両国の政策と研究者や教師たちの歩み寄りによって再出発を遂げる。1950年から行われた西ドイツ・フランス歴史教科書会議は1967年まで行われ、更に1981年から現在にいたるまで継続されている。2003年のエリゼ条約調印40周年記念のイベントでプロジェクトの実現が決まった独仏共通歴史教科書には、これまでの会議の成果が役立てられた。

これらの流れからドイツの歴史教育は時代の動きに合わせて変化しており、外国からの影響も注目すべき点であることがわかる。歴史教育は政治的な要因をもって変化し、さらに民間との協調も重要な作用であると考えられる。